

【論考】

文房具に示された芸術性

奈良女子大学 文学部

ジバイブン

-目次-

はじめに

I 芸術性を持つと思われる文房具

一、博物館収蔵品にヒントを得た文房具

二、レトロ文房具——時間がつくった芸術性

1、一代目の機械美学

2、芸術的商標、マークの芸術性

三、現代芸術と文房具

1、ミニマリズム

2、芸術家との提携

四、農民による文房具

II 芸術性のある文房具がもたらす意味

III 終わりに

=====

はじめに

文房具は私たちの長年のアシスタントとして、日頃から記録・勉強・提示などの務めを担っている。時代の発展につれ、身近な物である文房具も様々な変化を起し、外見、持った際の気分や書き心地など、異なる需要に応じて変わっていく。

では私たちは普段文房具を買うとき何を判断基準にしているのだろうか。機能性のよさはたしかに間違いのない選択だが、私の場合は一目惚れの「感覚」によって決めることが一番多い。

次のような場面を想像してみよう。文房具屋で目的もなくうろうろしていて急に目にかが留まる。文具というだけでなく、意外な特性を持っているものが目に映るのである。「この猫の形をしてる筆立て、かわいい！ワイヤーでできてるの？」、「このノートの表紙は渋いね。なんか深みのある文章が書けそう！」、「このノートの、金色のワイヤーを入れた設計はマジすごい、見逃せない！」など。

皆さんはこうした経験はあるだろうか。どのようなデザインが私たちの心を打つのだろうか。以下では幾つもの種類の芸術性を順にとりあげ、この問題について明らかにしていきたいと思う。

I 芸術性を持つと思われる文房具

一、博物館収蔵品にヒントを得た文房具

文房具と言えば、恐らく生活の中で見慣れたデザインを思い浮かべるだろう。一方で博物館で収蔵や展示されているものからデザインした、非日常的な文房具も昨今は流行っている。

たとえば故宮は、中国の歴史文化や芸術的精神を凝らした場所で、その中の展示品は元々神聖だと思われていたが、近年は文房具のデザインにも応用されている（図1-1と2）。精美なデザインと民族文化が融合し、そのような商品はまたたく間に人気を博し、好調な売り上げを続けてきた。日本のほとんどの博物館でも同様のグッズが存在する（図1-3は平等院ミュージアム鳳翔館で購入できるしおり）。



図1-1



図1-2



図1-3

モノによるコミュニケーションも教育の重要な一手段である。文化遺産の商品化の過程で、そこに含まれる文化は、集中から分散へ、深遠から普遍へと移行し、孤立的教育・教化的教育・抑圧的教育よりも効果を発揮する。さらに、文化的で創造的な優れた製品自体に教育機能があり、精神・感情・活力・知識・美的センスを高める役割がある。

博物館のショップエリアは通常、美術館の「最後の展示ホール」であり、1950年代頃にヨーロッパやアメリカの美術館で育ったとされるが、最近では中国内陸や台湾でも注目されている。店内のグッズには博物館の文化と哲学が反映しており、その人気・実用性・流通により消費者に満足感を与え、訪問者の興味と熱意を刺激する。同時に、消費者の歴史文化への接触をより緊密にし、博物館の教育機能をさらに拡張する。そのうえ、ここから営業収入を生み出すことにより好循環が実現し、美術館の持続可能性を高めることもできる。

二、レトロ文房具——時間がつくった芸術性

古い時代の文房具のデザインは、時間によって洗練され、歴史の厚みを感じられる。それらの文房具は、時代的な薫陶によって誕生した文化的な産物でもある。

1、一代目の機械美学

ヨーロッパから伝来してきた産業革命に影響された製品が20世紀にもしばしば見られる。

例えば、チェコスロバキア製の鉛筆削り（削る際に刃が鉛筆を下に引くので、上から鉛筆を押しさえなくても削れる仕組み：次頁図2-1）、1912年頃のアメリカ製卓上ホッチキス（くるくる尻尾を付けた爬虫類を思わせる形状により頻繁に針を追加する手間を省く：図2-2）、1918年頃の日本製ヨーロッパ風卓上針なしホッチキス（今の針なしホッチキスと同様に紙を綴じることができる：図2-3）など。産業革命後、機械を中心とした工業時代が到来し、機械には論理性、合理性のある構造が付与されている。



図 2 - 1



図 2 - 2



図 2 - 3

このような機械性を巧みに利用した文房具は、デザイナーが知恵をこらした仕組みによって使う人に好奇心を起こさせたり考究したい気持ちにさせるなど、科学に対する啓発的な効果があるかもしれない。古典の美学と違い、木製品から機械へという新たな時代の風貌が表された。つまりこの一代目の機械美学は、ロジックを重視し、機械的な構造を残したままでデザインされており、その素朴でざっくりとしたデザイン性が持ち味である。現代における二代目の機械美学は、さらに軽やかで柔軟性があり、流動性を重視した外観を帯びている。機械への愛着がさらに進み、機械に感情を付与したり、サイバーパンク風が流行したりと、この種の文房具は機械美学の発展とともに変化を見せる。

2、芸術的商標、マークの芸術性

最近若者の中でレトロ文具の風潮が流行ってきて、それを販売するメーカーや商店も増えてきた。レトロは懐古趣味のことである。現代的なレトロ製品によく見られるのは、レトロなイラストやマーク、レトロとしての代表的な絵柄の使用だ。製品とレトロな雰囲気フォントとを合わせたポスター（図2-4）、手描きの万年筆のデザインにレ



図 2 - 4

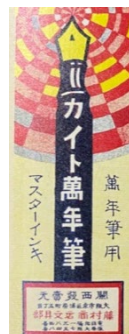


図 2 - 5



図 2 - 6

トロなフォントを配した広告（図2-5）、ヨーロッパから伝来した万年筆とインクを使う金髪の女性の半身絵は裸婦をモチーフとしたヨーロッパの油絵に通じるイメージである（図2-6）。これらの作品を観察してみると、赤、黄が多く使われており、緑や紫などの暗い色は少なく見える。なぜ赤は大量に使われているのか。赤は一番最初に精錬されたとされる色で、精錬する技法が成熟している。彩度と明度が高い赤と黄を合わせると、人々の視線を引きつけられる色合わせになるからではないだろうか。大正時代の広

告は、とにもかくにも自社製品を目玉商品として人々にインパクトを与え、記憶させることが重視されている。そういった姿勢が定着してレトロ風になったのだと推測する。

三、現代芸術と文房具

1、ミニマリズム

近年、日本の「無印良品」は世界的に大人気であり、日本のトレードマークのひとつともなっている。その簡潔さと、高い実用性は無印良品の見せどころであり、ヒットの原因でもある。例えば無印良品の詰替ペンは、白黒のクールなベース色で、派手ではない流暢な設計だ。さらに無印良品の定番である木の色のシールだけが合わせてあり、“無口けどまさにクール”といったイメージがある（図3-1）。

基本的に大量生産・大量消費の時代に誕生したポップアートは、ミニマリズムの前身となり、多くの人が好きそうな大衆文化を、クールでさらに理性的なミニマルアートに



図3-1



図3-2

変換した。あるグループにおいては、ミニマリズムは造形の秩序もしくは根拠として位置づけられるだけでなく視覚的にも表現され、デザイン製品あるいは芸術作品に具体的に反映されている。例えば、1929年に開館しモダンアートの殿堂ともいえるニューヨーク近代美術館（MOMA）は、20世紀以後の「現代美術」を象徴している。文房具作品も収蔵されているが、それらは最大限の機能性を発揮させているといえるだろう。作品を構成する線は極限まで簡易化されて視覚的な満足を与えている。機械が作ったはっきりした線を工業的に表現している点が、この時代特有の美の衝撃である（図3-2、図3-3・4、はミニマリズムを示す設計）。



図3-3



図3-4

永井由佳里 (1999) によれば、オランダの画家、建築家、美術家であるファン・ドゥースブルフは、その「造形の普遍性を追求するにあたって、自然形態との関連性や特殊で個人的な感情の表出を排除し、独立した形態を求めたことは、抽象美術のなかでもより純粋で、普遍的な形式として、数学の公理に基づく秩序や、幾何学的な形態の構成による作品を位置づけたことに通じており、デザインにおいても、美術においても幾何学的な造形表現と感覚的な情緒表現の分岐点を明確に示すものであった」という (永井1999: 144)。そして、「デ・スティールに代表されるような芸術の理論化が、徹底的に普遍性を求め、芸術領域までもを人間の感覚的な美の表現を越えたものとして追求される対象としたのは、芸術と技術を直接に結びつけようとした未来派やバウハウスに共通の姿勢である」 (同) という。そして永井は、「つまり、機能性の追求もしくは有用性の追求を、みずからの存在理由としてきたにもかかわらず、デザインの理論は機能それ自体について、あるいは技術なるものについて明確に捉えているわけではなく、他の領域と対照することでデザインにおける美の独自性を位置づけるしかなかったということである」 (同: 145) と考察している。このような視点は、上記の文房具作品を分析する上でも大いに役立つだろう。

2、芸術家との提携

どこでもある表紙のノートより、特別なスタイルの一冊をたまに欲しくなることはないだろうか。ふだん美術館でしか見られない絵画が、芸術家との提携によってノートの表紙となった例がある。デザイナーとシンクロするような体験ができるのだ (図3-5 はノートの表紙、図3-6はこの表紙画を描いた James Jean の作品。他の芸術家としては、Klas Fahlen などがある)。

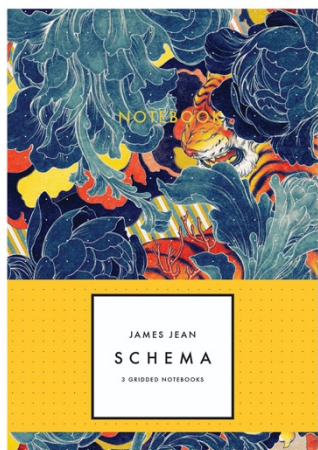


図3-5



図3-6

四、農民美術による文房具

工芸とは、「人間の日常生活において使用される道具類のうち、その材料・技巧・意匠によって美的効果を備えた物品、およびその製作の総称」である。「もともと生活用具としての実用性を備えたもので、その点、彫刻や絵画と異なり、建築とともに応用芸術の一つとみなされる。工芸は材料によって多くの種類に分けられ、陶磁、金工、漆工、木工、竹工、ガラス、染織などの諸部門に分類される」ような存在である (ともに永井信一「工芸」『日本大百科全書』より)。



図4-1



図4-2

そしてこの工芸のひとつであると考えられる農民美術は、誰かに強要されたのではなく、農民たちが、自発的に手作業で始めたもので、自分が楽しんだことが多いと報告されている。農民が作った作品の多くは農作業と関係があり、四季の農民の働きぶりが表現されている。また日常生活の中で触れた風景や、人の表情や、振る舞いなどが、主に人形の形で細かく手彫りで記録されており、「素朴な喜び」（石川・禹 2019：313）があふれているのだ。

このように農民美術で小型の木彫人形が作られる場合、「こっぱ人形」と呼ばれることがある。それは、「平面を組み合わせた多面的な造形が特徴」であり、「しかも、立体を構成する面の数は極度に少なく、例えば、一位一刀彫（岐阜県）と比べても、その単純化の度合いは顕著」（同上）とされる存在である（図4-1がその一例）。

韓国の例だが、図4-2のような手彫り文房具も、商品化されているとはいえ、農民美術の流れのなかにあるといえるのではないだろうか。

II 芸術性のある文房具がもたらす意味

現代は、物質的には多くが満たされている時代であるが、心の虚しさを満たすのはなかなか難しい。その状態が続くと、危険な情感に移行したり、希望を失ったり、活力を失ったりしかねない。そしてそのあげく、ハイスピードで回っている都会などが、消極的な気持ちをもたらし、動きが取れなくなるかもしれない。

そこで、いわゆる「癒し」工学（北岡哲子 2011・2016）によって、癒し効果の発揮が期待されて出てきたのが、さまざまな遊び場や温泉などのエンタテインメント、動物園や近年の猫カフェなどではないだろうか。そこでは日頃の生活上の注意や緊張を弛緩させてゆったりできる。娯楽・芸術・音楽・動物などが精神的な安らぎを与えてくれるのだ。

そして文房具も、元々は実用のために作られた道具だが、何百年以上ものあいだ人類のそばにいつもいてくれる相棒として、私たちが精神的に支える存在になってきた。人類は、文字を使うようになった時代から、文房具とは離れられなくなったのだ。私たちのそばで幼少期・青年期、そして仕事をするようになってからも、さらにそのあともついて来てくれる。それは時には思い出の品であり、時にはプレゼントとして感情がこめられ、時には感動を呼び起こすものであり、時には未知の文化と繋がる橋である。

III 終わりに

ひとは文房具を通して、様々な芸術性を体験できる。

博物館からもたらされた目を奪うような艶やかさから、農民美術の心を打つ素朴さまで、芸術はどこにでも存在している。芸術は日常より生じ、さらに日常を超越するものである。それを味わうとき、もう文房具はただの道具ではない。それは、手頃な価格で買えるサプライズであり、われわれはそこで小さな幸せと出会うのだ。

【参考文献】

たいみち、2016『古き良きアンティーク文房具の世界』誠文堂新光社

永井 由佳里、1999「ミニマリズムのデザインへの影響について」 『BULLETIN OF JSSD 1999 日本デザイン学会デザイン学研究』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssd/46/0/46_144/_pdf/-char/ja

石川義宗・禹在勇 2019「農民美術による工芸の概念的拡張」 『2BULLETIN OF JSSD 2019 日本デザイン学会 デザイン学研究』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssd/66/0/66_312/_pdf/-char/ja

北岡哲子 2011「癒しの分析と癒し工学への応用」 『日本機械学会シンポジウム：スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス 2011 後援論文集』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsmeshd/2011/0/2011_11/_pdf/-char/ja

北岡哲子 2016「癒やし工学」 『精密工学会誌』 82 巻, 1 号 : 36-42。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjspe/82/1/82_36/_pdf/-char/ja

MOMA design store <https://www.momastore.jp/shop/r/r0300/>

MOMA (Museum of Modern Art)美術館の公式ウェブサイト <https://www.moma.org/>
→館の収蔵文具の例：

リューマチのひとのためのペン：Hans Tollin **Pen for Rheumatic Persons** 1978 https://www.moma.org/collection/works/3947?classifications=any&date_begin=Pre-1850&date_end=2020&locale=ja&page=1&q=pen&with_images=1

メカニカル鉛筆とボールペン：Mitsuo Maki, Hosowo Tomohiro, Kikukawa Katsuyoshi, M. Katsuyoshi **Mechanical Pencil and Ball Point Pen** 1980 https://www.moma.org/collection/works/2876?classifications=any&date_begin=Pre-1850&date_end=2020&locale=ja&page=1&q=pen&with_images=1

ハサミ：Alan Spigelman **Scissors** 1980 https://www.moma.org/collection/works/3915?date_begin=Pre-1850&date_end=2020&locale=ja&page=1&q=Scissors&with_images=1

*

■本稿書誌情報

『文具に関する論考と企画：奈良女子大学文具ゼミ 2020』

[2020 年度「文化社会学演習」WEB 版報告書] <https://bun-gu-narajo.org/>

2020 年 8 月 1 日

編集・発行 国立大学法人奈良女子大学文学部

人文社会科学文化メディア学コース 小川伸彦研究室編

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 E-mail ogawanobuhiko@cc.nara-wu.ac.jp
